

□ : 山口県で陽性が確認されたもの

2 ネコの調査結果

検査対象		感染症名	検査方法	実施年度	陽性／ 検査件数	検出率%
ネ コ	口腔/ 病巣部 /咽頭	ジフテリア毒素産生性 コリネバクテリウム・ウルセランス 感染症	病原体分離	H19～21	0/ 186	0.0%
			遺伝子検出	H28 H30～R1	0/ 180	0.0%
	口腔	パストツレラ症	細菌培養	H14～15	64/ 81	79.0%
		カプノサイトファーガ感染症	病原体分離	H22～24	42/128	32.8%
			遺伝子検出	H22～24	107/128	83.6%
		重症熱性血小板減少症候群 (SFTS)	遺伝子検出	R 2～ 6	0/ 74 ^{※1}	0.0%
	糞便	サルモネラ症	細菌培養	H12～13	0/154	0.0%
		腸管出血性大腸菌感染症	細菌培養 ベロ毒素遺 伝子検出	H12～13	0/154	0.0%
		エルシニア感染症	細菌培養	H12～13	0/154	0.0%
		カンピロバクター症	細菌培養	H12～13	1/ 57	1.8%
		クリプトスポリジウム症	病原体検出	H14～16	0/ 86	0.0%
		ジアルジア症	病原体検出	H14～16	4/ 86	4.7%
		重症熱性血小板減少症候群 (SFTS)	遺伝子検出	R 4～ 6	0/ 44 ^{※2}	0.0%
	血清	トキソプラズマ症	抗体検出	H12～15	4/188	2.1%
		Q熱	抗体検出	H16～18	1/ 92	1.1%
		イヌブルセラ症	抗体検出	H17～19	1/ 33	3.0%
		E型肝炎	病原体 遺伝子検出	H17～19	0/ 90	0.0%
		猫ひっかき病	抗体検出	H13～15	30/128	23.4%
	血液	猫ひっかき病	病原体検出	H13～15	16/ 79	20.3%

※1 動物愛護センターに負傷動物として搬入されたネコ：46 検体

動物病院を受診した SFTS 発症ネコに認められる臨床症状を呈するネコ：28 検体

※2 動物愛護センターに負傷動物として搬入されたネコ：18 検体

動物病院を受診した SFTS 発症ネコに認められる臨床症状を呈するネコ：26 検体

注意を要する感染症（ネコ）

咬傷・搔傷による感染

パストレラ症

〈症状〉

- ・受傷部位の炎症（蜂窩織炎^{※1}）、関節炎、骨髓炎
- ・重症例では、敗血症^{※2}や骨髓炎により死亡することもある

カプノサイトファーガ感染症

〈症状〉

- ・発熱、倦怠感、腹痛、吐き気、頭痛
- ・重症例では敗血症^{※2}や髄膜炎により死亡することもある

重症熱性血小板減少症候群（SFTS）

〈症状〉

- ・6日から2週間の潜伏期を経て、発熱、消化器症状（食欲低下、嘔吐、下痢等）を発症し、重症例では死亡することもある
- ・罹患したネコから感染するおそれがある

糞便を介した感染

トキソプラズマ症

〈症状〉

[後天性感染]

- ・多くは不顕性感染^{※4}だが、リンパ節炎、目の網脈絡膜炎を発症することがある

[先天性感染]

- ・母体が妊娠中に初感染した場合、胎盤を介して胎児に感染し、胎児に流産、精神又は運動障害、脳内石灰化、水頭症^{※5}を起こすことがある

ジアルジア症

〈症状〉

- ・腹痛、下痢、嘔吐などの食中毒症状

※1 蜂窩織炎：皮膚の深いところから皮下脂肪組織にかけておこる化膿性炎症

※2 敗血症：血液中に病原体が入り込み、重篤な全身症状を引き起こす病気

※3 膿瘍：炎症により局部的に組織が融解して膿がたまった状態

※4 不顕性感染：感染しているが症状を示さない感染様式

※5 水頭症：頭蓋内に脳脊髄液が過量にたまり脳が圧迫を受けたり頭蓋内の圧が高くなる病気

予防方法

- 口移しで餌を与えたり、食器を共用するなど、動物との過剰なふれあいを避ける。
- 動物と接触した際は、手洗いを励行する。
- 咬まれたり、ひっかかれたりしないように注意する。
- 万一、咬傷や搔傷を受けた場合は、傷口を石鹸でよく洗い医療機関を受診する。
- 動物の適正飼養管理（ノミ、ダニの駆除等）を実施する。
- 動物の糞便を適切に処理する。
- 弱った野良ネコなどに不用意に触らない。

